地域おこし協力隊 筆甫地区 活動報告(平成24、4月5月度)

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手孝行

(活動報告)

① 地域振興部会 へそ大根事業

振興連より依頼して頂いた「へそ大根事業」活動。平成23年度事業の一切を終了。 農家よりの買上数量39kg ・仕入金額¥78,000- ・売上金額¥92,954-

- (成果)・初めて携わるつなぎ的な事業の取り組みの中、黒字事業にできた。
 - ・丸森町物産いちば 八雄館と契約。出品作業の具現化。POP の提供も実施。
 - ・筆甫地区の農家とのふれあいの間で筆甫地区の風土や歴史などを知れ、地元愛が増した。農家との 信頼関係の構築にも繋がり、今後の活動展開に幅が拡大できた。
 - ・出張販売の実施、ゆいネット発行のフリーマガジンに掲載させていただき、認知拡大できた。
- (課題)・へそ大根の類似商品が広範囲の地域で多数出回っている。更なるブランド化・差別化が必要。
 - ・地域の特産品のへそ大根の位置付けをどうしていくか。その判断により今後、農家の意識改革、 営業活動による販売チャンネル・ツール増加が必要になる。
 - ・昨年度は地域の状態が把握できずに、どのような活動が望ましいのか判断できずに苦慮した。 今年度は状況を明確に判断し、事業に取り組んでいきたい。

② 地域振興部会 耕作放棄地利用推進事業(ひまわり事業)

- (成果)・振興連、振興部会と連携、協同して約3反歩の耕作放棄地を借用し整備作業を実施中。 地域の環境美化。第6次産業の可能性を模索する活動となっている。
 - ・地域力衰退の象徴となっている耕作放棄地を整備利用することで、地域住民の耕作放棄地に 対する意識付けのきっかけになっている。
 - ・問題へ実際に自分ごとで作業に従事することで、学習できる物事が多数あり、見解が広がる。
- (課題)・地域産業に発展させていくことも目標に位置付けする場合、①人手の確保 ②地域に浸透し、評価してもらえる事業となること ③農業交流などで地域外の人材が事業に参加し、発展していくスキーム 等が必要となってくる。協力隊の事業が終了した後、どのような展開を目的とするかで取り組み方が変化するので確認しながら実行していく必要がある。



③ 地域資源(竹資源)活用方法の模索

(活動内容)現在までの活動で放置竹林が里山の環境や安全にどのような障害を招いているのか把握できた。放置された竹林にフォーカスしてもらえる方法を模索するための活動を実施中。

各コミュニティで実行されている実地研修を経て、経験を積み、知識を学び、筆甫地区を繋げてアウトプットに繋げていくことが目的。

◎竹テント製作中

筆甫地区内のコミュニティと協同して竹テント製作の技術取得を実施中。6月中には1張り完成させる予定。高齢者がものづくりの技術を活かせる場を創出させ、今後の展開を図りたい。

◎竹を資源活用している団体との共同作業

- ・「竹1060」プロジェクトのメンバーに参加。竹灯篭製作やプロジェクトのマネジメントのノウハウ を学習中。8月11日の「斎理幻夜」で竹テント、竹灯篭の演出披露を予定。
- ・NPO 法人「あぶくまの里山を守る会」の活動に参加。竹の肥料化活用、竹田んぼ活用等のノウハウを学習中。竹資源(地域資源)の循環サイクルや自然栽培は今後、顕著に社会で必要とされていく物事だと思うので、活動地域との線を意識しながら協同作業を継続していく。









「あぶくまの里山を守る会」の活動に参加中。①竹パウダー肥料の活用方法 ②竹の資源活用 ③自然栽培のノウハウを学習中。

他地区とのネットワーク 構築中。

④ ひっぽのマップ作成

(活動内容)昨年度、振興連から依頼されていいたマップ作成の継続。完成品を提出できなかった原因を報告し、協議した上で今年度、改めて業務に取組むことが決定。試作品の完成を達成させるのが目標。

⑤ コミュニティの運営補助・支援

・各行政区の地域行事に参加。環境美化、道路愛護、草刈作業、お茶飲み会、地域行事等に積極的に参加し 地域住民と交流を図ると共に、ニーズや問題の掘り起こしや労働力の提供を実施。

~地域おこし協力隊事業の展開を どう図っていくのか~

◎ "点"(単地域)のみの活動では未来を大きく変化される行動は難しい

現在までの活動経験から、単地域のみ、隊員一人のみで実施できる活動には限界があり、可能性を見出し、 意欲的・主体的な活動を継続していくのは大変難しいと判断する。

事業内容や諸条件での制限があるのは承知しているが、県、市町村、受託組織、ゆいネット、隊員が事業に対する方向性や位置づけ、今後どのような展開を図っていけば最良の結果を出していけるのか。密に協議して取り組めることには取り組み、変えられることは変えながら、より価値を生み出していける事業にしていきたい。未来を創造し、より素敵な社会をつくるために。

◎ "円と線"で拡大していく形成型

現在まで、福島県伊達市霊山地区、宮城県加美町の各地域おこし協力隊の方と連携活動している。 諸条件はもちろん相違するが、知る価値はある。

(宮城県加美町)

加美町では就農し、加美町に移住して自立をすること目的とした内容で、地域おこし協力隊事業を実施している。1番気になった事柄は支給される賃金以外に出荷した農作物からも収入を得ている事実だった。

「公」の活動に徹するのか、目的を達成するために「私」も混同させた活動も取り組むのが望ましいのか。

→各関連機関で求める最良の結果を協議し合うことも必要なのではないか?

(福島県伊達市)

伊達市では市を全体で地域おこし協力隊事業に取り組んでいた。霊山・梁川両地区で7名の隊員を受入れ 各担当地区で活動している。市とも密に連携し、役場では手が届かない地域の"物事"の橋渡しを実行して いた。各活動地域が線でつながり、市全体への円と拡大している地域おこし事業になっていた。

→ 丸森町として学ぶ面は多々あるように感じる。

(宮城県の事業)

今回、携わりを与えていただいた事業は「緊急雇用対策事業」の一環で一般企業にアウトソーシングされた 事業形態。目的や各地域や日本の未来に対する事業の位置づけ、今後のどう展開していけば理想的なのか、 どの地域・関連機関も曖昧な状態で事業期間が経過しているように感じている。

1度、明確にして協議する必要性があるのではなか。

地域おこし協力隊 筆甫地区担当

玉手 孝行

(活動ビジョン)

地域・住民に利益(生きがい・尊厳・交流なども含め)が発生する "コミュニティ・ビジネス"の きっかけ、機会の創出支援

(問い) 地域に利益(生きがい・尊厳・交流なども含め) が発生するスキーム形成のため、何ができるか?

- ① 人が集まるコミュニティ、交流スペースの機会と場所の創出 (地域の未来を創造して、ブレストする場への発展が目的)
- 1) 旧筆甫中学校体育館を利用し、スポーツ交流の場を創出→地域の問題を自分ごとにして、解決策をブレストできるようにコミュニティ形成を図る
- 1) 住民の交流スペースの創出支援。住民のニーズの中には交流の場が欲しいという声をよく聴く。住民が気軽に交流できる場を創出する。交流スペースが地域住民の癒しと意見交換のような場になること、後々は地域の問題解決とコミュニティの場が合致していくような きっかけになるように活動していく。※旧筆甫中学校の有効活用を考える会が発足予定なので参加
 - ② 地域資源を活用した"ものづくり"をする人々が活躍できる場の創出(生きがい・尊厳・交流)
- 1)地域の里山を侵食させ、荒廃の原因となっている竹の資源活用を図る(・竹テント製作→事業展開を目標 ・インテリア→竹ライト製作 ・竹パウダー肥料製造→地域活性)
- 2) 高齢者の農業サポート
 - ・地域住民、特に高齢者の生きがい、やりがい、交流の機会を地域の基幹産業の農業から創出するため の代行出荷・販売事業の方法を模索する。(竹テントを活用しての直売会等)
- (例)筆甫地区内のひとつの行政区でこんにゃく芋からの、手づくりのこんにゃくづくりが盛んに実施されている。「北山 こんにゃくサークル」を設立提案、運営販売サポートを実施。高齢者のやりがい、社会との交流機会の創出を目指す。(他行政区にも影響を波及させられる事例になり、コミュニティ形成、地域全体の発展)

③ 環境保全活動

- 1) 各行政区の道路愛護サポート、景観向上、道路清掃、道路整備、剪定作業、道路パトロール等
 - ④ 地域振興部会 耕作放棄地利用推進事業 (別紙参照)

⑤ 住民の生活支援

見守り・傾聴サービスを実施→サービスを通じ、地域を知り、新たなニーズを発掘し活動に転換させていく

⑥ 地域おこし支援

- - 昨年度は原発事故による放射能被害の影響で具体的な活動が実施されなかった。活動計画すらも提案されず、定例会の雰囲気も消沈、停滞しているように感じた。今年度は具体的な活動を行えるように、会員の気持ちが前向きになるような提案や活動を実行していきたい。

2) ひっぽ筆まつり実行委員会活動

- 今年度への課題は筆神社創立までに至った経緯とその時の感情を思い返していただけるようにアプローチをしたい。もう1度 筆甫の未来を想像して頂き、未来事業を形成する行事にすることを図る
- (課題) 実行委員会の人手不足と高齢化。また、新しい人材が委員会に入会しておらず、行事が義務化して 運営しているように感じる。地域の未来を創造する価値ある行事運営とまずは実行委員会と地域住 民が楽しめるお祭りになるようにサポート活動をしたい。
- 3) その他 地域行事への参加、コミュニティ支援サポート活動の実施

⑦ 他地域・丸森町 各行政区との交流事業

■ 前年度の経験から、地域外との交流事業を実施することで得られる経験と波及効果は大きな物事になると実感した。今年度は他地域と交流事業を通して、人脈を拡げ、ネットワークを構築してより多くの人たちが笑顔になり、未来を大切にできるような活動を実現化していきたい。

⑧ 地域の歴史調査・収集・資料まとめ

■ 地域の歴史調査冊子・観光マップ等作成。昨年度からの繰越作業。子どもから高齢者まで見て楽しめる筆甫の伝説マップを作成して、地域住民が筆甫への郷土愛を深める機会、地域散策への機会、話のネタの創出等、地域に対して興味関心が薄れてきている人がもう1度、地域に興味関心を抱いていただく材料にしたい。

⑨ 農業従事(時間外活動)

■ 日本の里山の基幹産業は農業である。農業が衰退して産業として成り立たなくなるような社会では 日本の未来がとても危惧される。食糧問題を考慮した際でも、農村、里山の活性化は改善していく 場合のカギになっていく。そうしたときに、日本の中山間地域で活動していくことが希望とやりが いに溢れ、たくさんの人が中山間地域に"観光"を感じるようになっていてほしい。

生活が成り立つような産業構造で社会経済活動ができる仕組みはそんな形があるか。農業経験を通して "百姓の知恵"を学び、よそ者・若者の視点をコラボさせて新しい当たり前をつくりたい。

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(6・7月度 活動報告)

- ① コミュニティ支援活動
 - ・(筆甫地区 健康祭り運営支援)

筆甫地区健康祭りに関する準備、当日の交通整備、進行放送係を務め運営の支援を実施。

- (成果) 形式に固執した放送進行ではなく、親近感と共感を持ってもらえるスピーカーを意識して行う。 今までにない好感と親近感のある放送だったと評価を受けた。
- (課題) 小学校と共同開催の行事でモラル的な面での弊害、名前を把握していない住民に差別感が生じた。
 - ・(高齢者のつどい運営支援)

筆甫地区各行政区で開催された「高齢者のつどい」に参加。会の運営支援を実地。

(成果) 高齢者のつどいでは、講師を招き講話を受けた。各地区嗜好が違い、講話に対する反応も直に感じられた。どんな物事が高齢者に受け入れられ、楽しんでもらえるのか、参考にできた。 "元気な高齢者"は地域を支える大事な要素なので今後、活用していきたい。

② 伊達市 地域おこし協力隊との交流事業

伊達市で活動中の地域おこし支援員との交流事業を進行中。"幻の県道"と呼ばれる「県道45号 丸森・霊山線」に関連した事業を計画中。振興連の地区別計画にも組み込まれているので、活動に 価値と展開を生み出せる活動にしていくことが目的。

- (成果)・6月12日に伊達市霊山地区 地域おこし協力隊2名、筆甫地区振興連絡協議会会長・事務局長・ 事務局員、筆甫地区選出丸森町議会議員、隊員 計7名で座談会を開催。情報交換と事業創造の 機会を創出。
 - ・7月3日に事務局員と丸森・霊山線の調査を実施。"笹ノ峠"の現在の状況の調査を実際に歩き、 霊山側まで行く。今後 どのような事業展開が望めるのか考慮し、実行していく。
- (課題)・事業計画の一環に「道路を整備して軽トラが通行できる状態に整備する」があったが、調査して その計画が困難なことが判明した。ウォーキング事業等を開催した際に集客でき、興味関心を持っ て口コミで情報発信できるような仕組みが必要になる。
 - 筆甫側だけで行動しても交流事業に発展しない。霊山側と連携して機運を高めていくこと。
 - ○目標(調査)→(林道整備)→(ウォーキング事業)→(霊山地区との交流事業)
 - ③ 環境保全活動:県道の交通障害になる笹・枝・竹・雑草の処理を駐在所署員と連携して実行。





普段は違うフィールドで 地域コミュニティを支える人材と 共同作業を実施すると、違う視点を 学べ、活動の視野が広がる。 今後も連携して活動して活動視野、 範囲を拡げていきたい。

④ 耕作放棄地利用推進事業(顔晴っぺ ひっぽ! ◎ひまわりスマイルプロジェクト◎)

筆甫地区振興連絡協議会 地域振興部会事業の耕作放棄地利用推進事業。

現在、3ヶ所の耕作放棄地の開墾・整備・利用を進行中。(別紙参照)

(成果)

- ・振興部会のメンバーの協力の下、放棄地の開墾整備、種播きまでが完了。数年間放棄されていた田畑が 整備され、地域の景観が美化、地域住民の放棄地に対する意識改善につながった。
- ・放棄地の1ヶ所に「ひまわり畑の迷路」を制作。事業本来の目的に付加価値を加えるプロジェクトを展開中。人を呼び込む機会創出、子どもの遊び場の創出、地域住民の意識改善の機会創出に発展させる。
- ・自然相手の"ものごと"に携わることで様々な学習を得ている。農業排水の整備不備で起こる現象、放棄された田畑の末路が周囲の農家に与える影響、農業の過酷さ、雑草の手入れ・草刈等々。今後の人生を生きていく貴重な経験を積ませてもらっている。

(課題)

- ・種の発芽率が悪い田畑、成育が順調な田畑で 大きな差が生じている。明確な原因究明には至っていないが、食害に遭っている。対策・改善が必要。目的のひとつである"お盆に帰郷し、お墓参りをしに訪れた人たちを楽しませる"を達成するのは困難な状況。来年度以降の課題。
- ・当初予定していた作付面積より作付面積が増加し、対応が困難な状態に陥ってしまった。どんな状況変化が起ころうとも、より良い結果を出すための準備は必要だと学んだ。1人の力には限界がある。地域の問題解決になる事業を共同作業してもらえるような"ビジョンのシェア"が必要。人を巻き込める人間力と行動力を身に付けていかなければ、収穫・搾油時に更なる苦労を引き起こす。
- ・"卓上の知識"から、種子の購入をしたが、実際に種子を播いたらリアルと卓上との間には差が生じ、 種の在庫が大量に余ってしまった。"経験による知恵"、経験の大切を学習した。



(7月以降の活動計画)

- ① (ひまわり事業の推進)
- ・問題(発芽しなかった田畑)を解決するための対応を実施し、ひまわりを見事に咲かせる作業を行う。

② 竹の資源活用

- ・地区内の放置竹林を整備し、竹チップを製造。ひまわり迷路の通路にマルチング材として使用することで 循環型資源活例を提示する。
- ・竹チップ肥料を製造して、ひまわり畑に使用。同じ条件下で実験検証し、資源化活用の可能性を図る。
- ・竹テント・竹ライト製作中。「竹1060」と連携して、8月11日の「斎理幻夜」で披露する。 個人で実行している"バンブー・エコ・ナイト"(竹ライトで趣のある夜をすごして、素敵に節電を8)を 提唱し、竹の資源活用で福祉につなげてく活動を進行。



知恵を学びつつ共同作業



筆甫で学んだ"循環型の資源活用" 実践中!!



(提言)

6月29日~7月1日に開催された 「第1回 地域おこし協力隊 東北サミット in 遊佐町」に参加し、 隊員21名、受け入れ自治体5名、総務省3名とサミットを共有してきた。事業が開始され今年度で 3年間の1次任期を終了する隊員、そして受け入れ自治体の評価や受け入れ態勢、任期終了後の支援制 度も整われつつあると感じてきた。今後この事業で成果・結果が総括され、第2次の「地域おこし」が 展開されてくる地域が出てくる。

今回のサミットを経て、素敵な人材に触れて「地域おこし協力隊」への誇りが向上した。また、未来 事業への可能性を感じてきた。この事業を機会に素晴らしい人材が地域で活動している事実を知った。 その事実は地域を変えていく大きな財産になる。

各自治体で複数名での事業活動している地域は受け入れ自治体・隊員のモチベーションや取組姿勢もポ ジティブであった。 現状、地域で1人で活動をしていると閉塞感と孤独で活動に展開が持てない部分も ある。

事業受け入れで「やるメリット」と「やらないデメリット」を比較したとき、やるメリットはあって も、やらないデメリットは存在するのか疑問だ。現在、地域おこし協力隊事業に関係している機関が、 事業を受け入れることで地域の未来が変化していく可能性を示唆して、宮城県、丸森町の未来が素敵に 変わっていける行動を起こしていける働きかけを実行していくことを希望する。

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(7月·8月度 活動報告)

- ① 耕作放棄地利用推進事業(顔晴っぺ ひっぽ! ©ひまわりスマイルプロジェクト©) 筆甫地区振興連絡協議会 地域振興部会事業の耕作放棄地利用推進事業 (成果)
- ・事業実施畑の1ヶ所(約5アール)でひまわりが開花。昨年まで放棄されていた土地が事業の取組によって、景観作物としての価値を提供。地域に新たな可能性を提示した。
 - ① 耕作放棄地の活用方法の提示 ② 耕作放棄地利用への意識 ③コミュニティ創造
- ・支援員のサポートの下、地域住民に在庫になった種子を配布。ボランティアが栽培を実施。 振興連単独事業のみの取組でなく、地域一体の事業に発展した。 → (景観美化、福祉)
- ・(三本木町の「ひまわりの丘」6次産業化事業の視察研修実施) ひまわり事業において、今後、収穫・加工作業の取組方法をどういった作業で実施していくのか、課題が 山積していた。ひまわり事業で地域おこしを実行している三本木町の視察・研修を行い、筆甫地区での栽 培の取組方法を模索・選考する。外側から見える物事や景色を、運営側からの視点で観ることでひとつの 事業を構築・継続・発展させていく厳しさを学ぶ。
- ・(丸森町農業創造センターとの連携) ひまわり事業を丸森町農業創造センターと連携して進行中。発芽率の悪い畑の原因究明の作業を実施。 情報交換、視察・研修の同行等、ひまわり事業を筆甫地区のみだけでなく、他地区へ拡大させて取り組ん でいく機会創出を図る。

(課題)

- ・事業目的のひとつに「お盆に合わせて開花させ、筆甫へ帰省した人への復興をアピールする」があった。 しかし、新規事業だったので栽培方法が不透明で成功できなかった。 失敗事例・理由を報告し、今後の情報にしていただく。
- ・収穫・加工の作業方法が手作業になる予定。明らかに人員不足で、作業工程に支障がでることが予想される。どのように目的を達成させていくか、よいアイデアが出ていない。
- ・ひまわり迷路を製作して作付したが、・食害による低発芽率 ・ひわまりの成長スピードのばらつき、 雑草への対応不備、耕作放棄地の状態の違い等で困難している状態。
- ・地域住民からは、作業に対して効率的な作業のアドバイスをいただいていた。効率的作業と付加価値の 創造との間で揺れていたが、様々な要因でどちらも中途半端な結果を招いてしまった。



見事に開花したが、さすが「向日葵」。 県道側の反対側を向いて開花・・・。 残念!

栽培・開花に成功した畑(プール隣)○背大 約2mまで成長○花の直径25~30cm○本数 約1000本





◎農業創造センターと連携 食害の原因究明や対応策等 の指導を仰ぐ

→今後の展開を図る

◎三本木町視察・研修実施 栽培・6次産業化・ひまわり を資源としての地域おこし への取組みの事例を学習。



き動ア域 りをでは り参花も 花・1 では (発芽率が悪かった転作田) 来年度、事業展開していくために現状把握を確実に実施し、報告していく。

② 地域資源の発掘・構築作業(竹資源の活用)

筆甫地区で循環型の竹資源活用方法を学習し、竹資源の活用方法の構築に取り組み、進行してきた。

- 1、地域住民と共同での"竹テント"製作
- 2、 竹ライトを製作し、エコと資源活用の情報発信
- 3、竹チップ肥料を製造し、実際に使用し、効果を検証してみ
- → 丸森で「TAKE1060」プロジェクトという活動をしている団体に参加し、丸森を代表するイベントでもある斉理幻夜(8月11日開催)において、『丸森の竹で何ができるか』をテーマに、竹の資源活用方法の事例を観光客に提供、情報発信を実施した。
 - (1) コミュニティ形成 (2) 団体の運営・継続・発展の事例 (3) ビジョンを共有することでどのような結果を生み出すことができるか (4) ひとつのプロジェクトを成功するまでの工程・段取り等々、貴重な経験と学びを得れた。







(成果)

- ・TAKE1060 プロジェクトの現場に訪れた約500人に「丸森の竹を使ってなにができるか」のマインドを披露、情報発信できた。 → (竹ライト、竹プランター、竹テントの需要確認)
- ・筆甫の地域住民と共同作業で竹テントを製作する過程で新たな信頼関係ができた。 高齢者の知恵や技術の価値を目の当たりにして、"人材(人財)"としての可能性を実感できた。

(課題)

- ・竹工芸品の需要は把握できた。その価値と需要、活動の意味を提供し、小さな産業に発展さていくことが 課題。どのような場に、どのようなアプローチで情報発信し、展開していけばいいのか思案中。
- ・どんなプロジェクトにも人員の確保が難点になっている。これから実施していく様々な活動において人を どう巻き込んで展開させていくのかが課題。

① ("竹テント"使用機会のアピール活動)

- → 共同作業で製作していただいた竹テントを有効活用する場と機会の創出を目指す。
- ・青空直売所 ・イベント会場 ・丸森町内の地区イベントなどで使用してもらい、まずは人目につかせ、 存在をアピールして需要を発掘していく。

② (竹チップ肥料の効果実験)

竹林整備に付加価値を付ける作業で"竹チップ肥料"を製造した。8月末に完成するので、活用してほしいと申し出ていただいた耕作放棄地に大根を作付し、効果の程を検証実験する。

→有機栽培、循環型の資源活用の取り組みでの付加価値、へそ大根の新たなブランド化に発展等を目標に。

③ (マップ製作の情報収集)

ひまわりの子実収穫までの期間で、筆甫地区内2地区の情報収集を実施。仮のマップを作成する。

【提言】

今回「竹1060」プロジェクトに参加し、ひとつのプロジェクトを形成していく過程で学び得た経験・知識・人脈は価値ある財産になった。得た財産を活動地域に持ち帰って活用したいと望んでも、人員の問題はやはり支障になる。

「地域おこし協力隊」の隊員が丸森町の各地区で活動していると仮定すると、元気や勢い、魅力的な団体や活動に地区を越えて参加し、各隊員が学習し、必要な場合は他地区の隊員に支援をもらって活動する。そのような協力体制を各地区で実施して、町全体としてムーブメントを起こす。とても大きな可能性と魅力を感じる。

行政・民間・NPO・ボランティアでもいない視点、活動範囲で地域おこしを実施していけるのが「地域おこし協力隊」である。しがらみ・固定観念無く、各地区や地区民、また、行政と住民を繋ぐことができる それが「地域おこし協力隊」事業の魅力である。そのような環境下のフィールドで活動してみたいと思考するような機会になった。



- ① 地域に人材(協力隊)が入り、
- ② 行政や各地区のコミュセンができないものごとを
- ③ ネットワークを構築することで
- 4)模索・実行して、
- ⑤ 新しい地域づくりを行う

点(単地区)が、線(ネットワーク)でつながり、全体の円になっていくような取り組みが理想。

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(8月·9月度 活動報告)

① 耕作放棄地利用推進事業 (ひまわり事業)

- (成果)・担当したひまわり畑3ヶ所で、子実収穫の目的を達成見込み可能な花が開花した。プロジェクト起こし。行動を地域住民に示すことで、地域創造や将来の変化への機会創出のひとつのモデルになったと判断している。また、景観作物としての価値を提供。写真を撮影してくださる方もいて報われた瞬間を体感できた。
 - ・ひまわり事業を推進する過程で隊員の作業姿を観察してくれていた地域住民の方が、畑の使用を申し出てくれた。地域住民の目に観える活動を行うことで、活動に進展が発生する経験をした。
- (課題)・地域住民が耕作放棄地にひまわりを作付している事実は周知していたが、"誰が、どういった経緯で、なんのために行動を起こしているのか"の事業目的は認知されていなかった。「看板設置」も 部会に提案したが今年度は様子を観るということで、実施に至らなかった。

看板を設置することで ①事業の目的を地域住民とシェアをする ②事業活動に結果責任を伴わせることで、より価値の高い行動になる ③地域外からの訪問者に筆甫地区をアピールすることなどの効果が望める。

・小学校下の作付畑は ススキやヨシ、竹などが群生していた場所で、ヒマワリの発芽率が悪く、景観も悪くなった。地権者からも酷評をいただいた。迷路製作も行ったが、利用方法をどの方向性に持っていくべきか不透明で利用価値も曖昧にしてしまった。

② 復興六起インターンシップ参加

・振興連から委託を受けている「丸森・霊山線事業」の一環で、霊山町総合支所で地域おこし協力隊と 打ち合わせをした際に、「復興六起インターンシップ」の開催に伴う、参加の要望を受けた。

(参加目的)

- ・インターンシップ参加による隊員の人材力向上。学んだ知識を活動地域に還元すること
- 伊達市地域おこし協力隊とのネットワーク構築による連携事業の模索
- ・伊達市の事業取組の事例を丸森町に報告することで、丸森町での地域おこし協力隊受入れの推進を図る
- ・会場が丸森・霊山線の工事未着工地の大石地区「りょうぜん里山がっこう」。大石地区でフィールドワークを行いやすくなり、コミュニケーションをとりやすくなる。事業の推進に繋がる可能性が望める
- 丸森・霊山線の交流事業は、霊山町の隊員との連携で行っている。日付期限を明記した事業計画書を提出しているが、予定通りに進行していない。先方の立場、地区の状況もあるだろうが、地区に自身も入ることで目的を達成してできるように行動していきたい。
- ・笹ノ峠を霊山側までウォーキングで行ける状態に草刈作業を実施する
- ・霊山大石地区で10月・11月に獅子舞等のお祭りが開催されるので交流事業を具現化したい

③ 山形県 西川町 大井沢地区 地域づくり振興会視察研修受け入れ

・山形県西川町で活動している地域おこし協力隊から、私のブログ・フェイスブックで活動を閲覧してしたいただいたことがきっかけで、丸森町への視察研修のアポイントを頂いた。調整は振興会メンバーの役場職員と行う。8月31日(金)に西川町 大井沢地区 地域づくり進行協議会11名の視察研修を受け入れ、「ものづくり」をテーマにしたスクジュールのコーディネイトを実行。

(成果)

- ・今回のアポイントを受け入れることで、山形県西川町とのネットワークが構築された
- 「外から人を呼び込むこと」「地域のコーディネーター」隊員として意識していた活動が具現化できた
- ・スケジュールをプランニングする上で、丸森町内の各人、場とのネットワークが深まった
- ・現在までの活動で「人にお願いする・頼む・巻き込む」の課題を改善する良い機会になった





プレゼントしていただけた。をいただく。学び多い機会を丸森町内3ヶ所、5名に講話「ものづくり」をテーマに

④ 耕作放棄地活用・へそ大根事業

筆甫地区 鷲ノ平行政区の地域住民から、現在、作付使用されていない畑(面積 約5畝歩)を活用してみないかと申し出ていただけた。隊員個人で管理するのではなく、住民と共同で作業することを条件に 約5畝歩に大根の種の播種を実施中。高齢化、過疎がとくに顕著な部落で、地域コミュニティの存続の危機に面している。反面、結束力が強い部落で学び得ることが多い。

(目的)

- 耕作放棄の回避 ・グリーンツーリズム (大根収穫イベント、へそ大根製造体験)
- ・空家倉庫の活用 ・販売収益(加工品製造)→ 炭窯建築の資金に充てる
- →地域の意向を大切にしながら、活動を推進していく。

⑤ 地域行事の参加(支援・運営サポート)

- ・振興連事業の敬老会運営サポート・県境交流スポーツ大会運営サポート
- ・各行政区 高齢者コミュニティ(お茶飲み会)の準備・運営・司会サポート
- →要請を受けて、各 地域行事、コミュニティの支援活動を実施。

⑥ 地域伝承マップ作成情報収集

・1件1件回る程度のレベルでフィールドワークを実施し、情報収集中。現在3部落の施策マップが完成。今後も情報収集をし、筆甫全地区の試作品を12月末までに完成させる。

(9月の活動予定)

① 耕作放棄地利用推進事業(ひまわり事業)

- (1) 9月20日より、花の刈り取り収穫を実行
- (2) 収穫後、7日間の天日乾燥
- (3) 天日乾燥後、子実の収穫

(今後の展開)

- ・収穫・乾燥した状態を観て、価格を確認した後、搾油精製をアウトソーシングする(部会に報告後)
- → 製品化まで具現化できたら、筆甫秋まつりでの販売を申請する(竹テントコラボ・地域資源の活用)
- → ひまわりの種を5粒程度パッケージして、全戸配布する。来年度の展開を図る。
- → 振興連事業とコラボして、ひまわり種を使用したおかしづくり講座を開催して、お茶会を開く。 また、ボランティアを募集して参加者をお茶会に招待する。地区でひまわり事業の発展を模索する目的。

② 丸森・霊山線交流事業

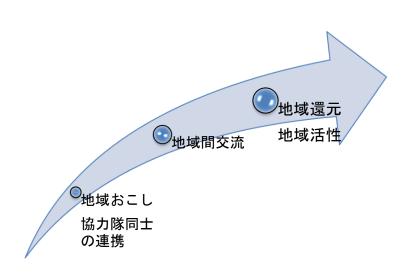
・「復興六起」のインターンシップに参加しながら、霊山町の隊員と行動を共にし、 交流事業の具現化に向けて活動する。

③ 地域伝承マップ調査と試作品作成

・今年中(12月まで)には、筆甫地区各行政区のマップ試作品を完成させ、提出する。 どのような完成図が理想なのか相談しながら、支援できる部分はその後も継続して活動する。

④ 耕作放棄地活用・へそ大根事業

- ・鷲ノ平部落の住民と どういった活動が地域創造に繋がる1番の行動になるか協議しながら、連携して大根畑の管理を行う。
- →大根の芽が5cm程度に成長したら、竹チップ肥料を加え、比較して効果の程を検証していく。



西川町との交流事業を体験して

今回、西川町との交流を経験して 地域おこし協力隊が地域で活動し ていることで、新しい可能性を 創出できることを実感した。

- (1)協力隊同士で地域間交流を開始
- (2)協力隊がパイプになり、地域間交流・連携を開始
- (3)協力隊が活動することで、相互の活動地域でアクションが発生し地域おこしの機会創出につながる

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(9月度 活動報告)



① 耕作放棄地利用推進事業 (ひまわり事業)

- ひまわりの刈り取り作業の開始
- ・地域振興部会を開催していただき、 今後の子実の処置の協議を実施
- →その対応を予想して、搾油工場への 問い合わせ、資料作成(別紙参照)

② 地域伝承マップ (筆甫地区の歴史的文化財をマップする作業)

- ・8地区のうち、3地区の試作品が完成(別紙参照)。支援員の助言の下、2地区を かわら版で全戸配布を実施。更なる情報収集とマップに対する意見を募り、形成していきたい。
- →隊員個人のマインドとしては、地域を伝承してきた方々がマップを見て、思い出や地域を回想してもらえる機会像になること。また、地域の子ども、筆甫地区外に住んでいる方が見て、楽しい気持ちになり、地域に興味関心を抱いてもらえるようなマップを目指し作成中。 今後、意見、要望を受け入れ住民情報を反映させ形成していきたい。

(隊員のスキルは限られている)

- (1) 現在の手描きの試作品を提出して全戸配布してもらう
- (2) 全戸配布で確認してもらった後、もう1度 地域を回って情報を収集する
- (3) 試作品を全戸配布して要望・情報を寄せてもらい、改善する
- (4) 筆甫地区、8地区の手描きのマップを提出
- (4)までの作業で隊員のマップ作成活動は終了とさせていただきたい。 その後の対応はゆいネットと支援員で、どの段階の作業まで要望を受け入れるか 支援員、ゆいネット、隊員の合意形成で作業を完了したい。

地域資源活用活動(時間外)

- ◎筆甫の竹を資源化しようと製作していた 竹ライトを求める消費者が発生し、販売し てほしいと申し出てもらえる事実が発生。
- ① 個人売買では地域活性への事業に発展し ない。竹 1060 プロジェクトの代表に相談 し、展開を図る活動の方策の相談を実施。
- ② 反省会の席で団体の発展のために、収益活 動の提案行う。現在、交渉中。
- →筆甫地区の技術を兼ね備えた元気な高齢者 の人材活用につなげたい。
- →「丸森=竹(たけのこ)資源活用」のイメ ージの確立。
- →元気な団体への若者勧誘による、人材育成。

耕作放棄地で なんかしてみっぺ (時間外)

鷲の平部落の耕作放棄地(約5畝歩)に大根を栽培。

- ① 耕作放棄地の回避、利用
- ② 地区住民とのコミュニケーション創出
- ③ 「原因」を発生させることで、「結果」を創出
- → 沿岸部で被災し仮設住宅生活を余儀なくされて いる方々、子供たちを招いての大根抜きなどで交流 事業を開催できないかと思考していた。沿岸部と筆 甫の状況の情報交換、地域発信、交流機会の創出な どを図ることで、何かしらの結果を生み出したかっ たが、自然に左右される農業の困難さの現実を心身 で痛感中。経験不足。

竹ライトは、新米 10 kgとビール 1 ケース と物々交換になった。「ユダヤ人大富豪の 教え」の著者の本田健氏の夢は「人が皆、 自分の好きなことをして、生きていける社 会創造」と唱えている。得意を活かした 「物々交換市」などを開催できれば、地区 の人材・資源発掘に進展する可能性を実感 する結果を習得。各地区に協力隊が存在す れば、推進力に拍車がかかる。



里山は めるもの探しで、手を加えてあげれば その機会・場・仕組みの創出を「 人を喜ばせる資源が盛り沢山 使用されている竹ライト。

竹チップマルチング使用





農業の厳しさ習得中 (無農薬で害虫被害)



- ① 耕作放棄地利用推進事業(ひまわり事業)
 - ・ひまわりの花の収穫作業
 - 子実の乾燥作業
 - ・子実の収穫作業(花から種を獲る作業)
- ② 地域伝承マップ作成作業
 - ・10月中に裏区、中区、古田、3地区の試作品を完成させる
 - 全戸配布した上区、鷲ノ平地区の改善作業
- ③ 丸森・霊山地区 交流事業の推進
 - ・伊達市霊山地区の地域おこし協力隊の意向を確認して、実施できること、実施でいないことを再確認する。実施できることは実行し、今後の可能性を確認できたものは報告する。
- →霊山町大石地区は来年度、自治会設立に向けて活動中と報告を受けた。今年度はお互いの地区行事の情報 交換を行い、互いに行事に参加し合って進行を深め、来年度につなげたいとのこと。10月20日に大石地 区の行事に参加し、大石地区の役職員と交流してくる予定。

地域おこし協力隊事業の任期も(有休消化を考慮すると)実質5ヶ月である。

月末に開催されている三地区合同情報交換会の席で、この事業の方向性・着地点の意向・意見交換の実施をしてみてはどうか?

私個人の意見を述べさせていただくと、現状経過だと地域から要望を受けた作業遂行で任期の終了を迎えてしまう。"緊急雇用対策事業"としては名目を果たす形にはなるだろうが、現実に少子高齢化・過疎進行が顕著な地域で生活、仕事を行ってみて、「人材不足」の問題はコミュニティー崩壊に直接関係する問題だと認識できた。その現状把握を出来たからこそ、人材が地域に入る事業の価値、可能性を感じた。

- ① 行政(役場)は事業を受け入れることで、各地区にどんなメリットが生じると予想しているか? 実行しないとしたら、その理由は何か?
- ② 隊員自身は、この事業の価値は どんなところに感じているか?
- ③ 受け入れ地域は、今後 行政で事業を開始した場合、どのような協力体制が築ければ、より素敵な地域づくりを実施していけるか?などなど。

昨年度、隊員を交えてのそのような意見交換は実施されなかった。作業に埋没して任期終了を迎えるのがベストなら構わない。しかし、事業に対しての意見・意向をシェアすることで活動に転嫁できることもあるのではないか。地域から要求されている作業は確実に熟し、その先に在るニーズの発掘作業を実施することで今回の事業に携わらせていただけた事実が今後に活かせる経験に成る。

地域おこし協力隊事業 三地区合同情報交換会

日時: 2012年10月25日

筆甫地区担当: 玉手 孝行

24 年度の業務 (振興連)

- ① 耕作放棄地利用推進事業
- → ひまわり栽培
- ② 地域の文化・歴史をまとめ、形にする
- → 地域伝承マップ
- 3 霊山地区との交流事業
- → 幻の県道(林道)を繋げる機運 を高める活動
- 4 へそ大根の拡販
- → 地区の特産品の拡販業務

隊員活動

- ① 地域資源活用方法の模索・確立活動
- → 竹テント、竹ライト、竹チップ製作
- ② 他県の地域おこし協力隊間とのネットワーク構築
- ③ 地域おこし協力隊の認知拡大



地域おこし協力隊事業を 宮城県内各地域でも開始して、 人材が地域に入り活躍してもらいたい!!

① 耕作放棄地利用推進事業(ヒマワリ栽培)

筆甫地区振興連絡協議会の地域振興部会の事業をアウトソーシング委託。事業予算も計上していただき、 地区内の耕作放棄地を借りてヒマワリの栽培を実施。全体で約7反歩へ作付。

隊員の担当は約2反5畝歩で、3ヶ所の畑で栽培作業。

成果・結果

- ◎部会委員の協力の下、耕作放棄地を開墾して ヒマワリを3ヶ所の畑で開花させる
- ☞ 景観作物として価値を提供
- ☞ 地域住民に元気のプレゼント
- ☞ 耕作放棄地活用の可能性を示唆した
- ◎地区内で集落協定 中山地域直接支払制度を 利用している団体と協同して作業を実施した
- ◎丸森町農業創造センターと連携・協力作業
- ☞ 三本木町への視察研修を企画し、同行で視察研修を実施。ノウハウを共同で学んだ
- ◎子実を約40kg収穫

反省・課題

- ⊗具体的なスキームの構築も指示されていたが、明確なスキーム構築には至っていない
- ☞ ビジョンを示し、人をヤル気にさせる活動が 実行できなかった
- ⊗付加価値をプラスする事業に発展させたかったが、部会で了承を得るには至らなかった
- ☞ ヒマワリ迷路で人を呼び込む、メディアを活用する、看板を設置する等で住民への認知、事業目的に付加価値をプラスしたかったが、実現活動を実行しなかった
- ⊗担当以外の畑の管理をやる前から放棄してしまった

② 他県地域おこし協力隊とのネットワーク構築・霊山地区交流事業の模索

福島県伊達市で活動している地域おこし協力隊とネットワークをつなぐことで活動が進展した

(丸森・霊山線の機運を高める交流事業の模索) (成果)

- ・振興連に報告・相談し会談の席を準備して頂く
- ・丸森・霊山線、笹ノ峠の調査実施
- ・霊山側に報告し、共同活動を依頼する
- →現在、お互いの行事で交流し、親交を築いている最中。筆まつりの場で霊山太鼓・神楽を披露 してもらえないか依頼、検討中。

(課題)

隊員活動が今年度で終了することは決定している中で、来年度以降にどう繋げていくかが課題。

(地域おこし協力隊東北サミット参加)

東北地方で活動する地域おこし協力隊が、自主企画で開催したサミットに参加。各隊員の具体的活動内容や地域での成果、地域の評価、また、受入行政担当者の仕事、総務省担当者の見解をシェアできたことで活動にアウトプットできた。



山形県西川町大井沢地域づくり振興会16名の研修を受け入れ、企画。丸森町(筆甫)の認知・情報発信につながるコーディネートを実施。





サミットには総務省・2行政の担当者、隊員20名参加。 新聞の記事に掲載され、 認知拡大に。



地域おこし協力隊同士がネットワークを築き、精力的に活動することが社会・地域への認知拡大を図ることになる。それが、隊員がより価値ある活動をできる環境を整備していくことになる。その認知活動は今後の地域づくりに大きな意味を成すことだと判断する。

- ◎ 人材・人員的な面での協力関係
- ◎ アイデアの協力関係
- ◎ 地域間の交流創出

点と点が、線で繋がり、線が動くことで、円となる。点が円に発展していくような地域づくりの可能性を感じた。宮城県各地において、地域・組織をの枠を超えて活動できる人材(地域おこし協力隊)が働き、協力体制を構築できれば "わくわく" するような活動が各地で展開する可能性を今年度の活動で感じている。

とマクリプロジェクトの活動の様子



放棄された田畑。地域力の衰退、景 観の荒廃になっている。U字側溝は 土砂、植物で見えない状態になり、 隣の畑に迷惑になっていた。



人の手が入らなくなり、側溝 が氾濫を起こしてた状態。



側溝上げ、草刈りなど、百姓の基本作業を実施し、地域の結を学習した。



集落協定参加の住民と結作業



付加価値を加えるために ヒマワリ迷路作成。



明確なビジョンが持てず、付加価値を 提供するレベルまで達せなかった。



具体的な活動を起こさず、管理も 手抜きになってしまった迷路。



サークル型で開花を計画した が、鳥害で再度播種を実施。自 然仕事の厳しさを学ぶ。



耕作放棄地を利用し、活動を起こすことで が、可能性の創出になる事実を提示。







3ヶ所の畑のうち無事に収穫できたのは1実たのは3年にのは1実たのは1実はの子後の処置されていない。今後の処置は土事が「主導」のr「協力で支援」なのか判断でしてきた。

地域自主活動団体に参加(竹10607ロジェクト)

筆甫地区振興連絡協議会で竹林整備を実施しており、価値ある学びを得させていただいた。それから、里山の竹の侵食・荒廃の問題、竹の資源活用方法(地域資源の創出)の模索にフォーカスしてきた。

地区住民の人材活躍の場を創造し、**『地域問題を解決する行動が、資源活用につながること。その行動が** 小さな産業に発展する機会創出になること』を意識して行動してきた。











- ① グリーンツーリズム運営支援
- ② 地区住民共同で竹テント製作
- ③ イベント出品・活用モデル披露
- ④ 筆甫の竹を資源活用
- ⑤ クラインガルテン管理組合に提案し、荒廃した竹林の整備を実施。竹チップ肥料を製造し、肥料活用、マルチング材施行。
- →その効果の検証を図る
- ① 丸森町主催のグリーンツーリズムのメニュー「竹の木工教室」に参加したことがきっかけで、 「竹 1060 プロジェクト」加入。協同活動開始。
- 2) 筆甫地区住民に協力要請し、竹テントを製作。
- 3) 丸森 斉理幻夜と同時にイベントを開催。竹の資源活用のモデルを披露する。
- ④ 「竹 1060 プロジェクト」を窓口に、産業の機会創出に発展する活動を提案中。

「竹1060」プロジェクトに参加し、ひとつのプロジェクトを形成していく過程で学び得た経験・知識・人脈は価値ある財産になった。得た財産を活動地域に持ち帰って活用したいと望んでも、人員の問題はやはり支障になる。 限界集落目前となった臨界集落で活発な行動を共に行える人材を探すのは、レベルが高い行動だ。

「地域おこし協力隊」の隊員が丸森町の各地区で活動していると仮定すると、元気や勢い、魅力的な団体や活動に地区を越えて参加し、各隊員が学習し、必要な場合は他地区の隊員に支援をもらって協同活動する。そのような協力体制を各地区で実施して、町全体としてムーブメントを起こす。とても大きな可能性と魅力を感じる。

行政・民間・NPO・ボランティアでもいない視点、活動範囲で地域おこしを実施していけるのが「地域おこし協力隊」である。しがらみ・固定観念無く、各地区や地区民、また、行政と住民を繋ぐことができる それが「地域おこし協力隊」事業の魅力である。そのような環境下のフィールドで活動してみたいと思考するような機会になった。



- ① 地域に人材(協力隊)が入り、
- ② 行政や各地区のコミュセンが 実施できないものごとを
- ③ ネットワークを構築することで
- ④ 模索・実行して、
- ⑤ 新しい地域づくりを行う

点(単地区)が、線(ネットワーク)でつながり、全体の円になっていくような取り組みが理想。

(活動で学んだこと)

現在までの隊員の活動は孤独と葛藤との戦いであった。"地区住民を巻き込み活動を発展させる""事業のスキームを形成する"等の課題は常に指摘されてきたが、人をやる気にさせるスキル、方法、人間力は隊員から提供できなかった。しかし、主体的に行動している団体と協同作業を行うことで"人を巻き込むために必要な物事""活動が継続・発展的に行われるためには"等の地域おこしに繋がるヒントも得た。

また、筆甫地区と隣接している伊達市の地域おこし協力隊事業の取り組みやビジョンにも触れた経験上で 実感しているのは、丸森町でも各地区に隊員が入り、複数人活動する環境が整った場合、「活動内容・提供 できる価値・創出できる物事」も素敵な方向に変化していくということだ。

ビジョンを共有でき、活動を活発に行え、ある程度自由に行動できる人材が地域と行政、地区と地区、人と人をつなぐ役割を担うこと。そして、成果を地域住民に提示していくことができたのなら、隊員活動の行動に協同してくれる人材も出現してくるのではないか。活動を共にする過程で次世代を担う人材育成にもつながっていく。そして、地域づくり、地域おこしへと発展していくと判断している。

各地区の隊員とネットワークを図ってきたことで、事業活動の問題点もシェアすることができた。事業を受入れ、隊員が活動開始するだけでは成果・結果につながらない事実も把握している。受入側のビジョン、人材活用策、隊員へのニーズによって活動内容の価値が上下している。「地域・隊員・行政」が Win Win で事業進行していく環境整備されることが今後の課題とみている。

今回の隊員活動が宮城県内において遅行している地域おこし協力隊事業の推進に繋がることを懇願している。

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(10月度 活動報告)

① 「耕作放棄地利用推進事業(ひまわり事業)」

(成果)

- ず 中井のひまわり畑の刈り取り作業を実施、約40kgの事実を収穫
- ☞ 中区集落協定参加者に協力を仰ぎ、作業協力を依頼。3名の協力を得て、作業を実施
- ☞ 丸森町農業創造センターより、花(子実付き)の提供を頂く

(課題)

- ☞ 目的を明確にできず、受動的な活動になってしまった
- ① 収穫作業は県道沿いの農協倉庫で実施した。住民が往来する場所での作業は、住民が声掛けをしてくれ、心配りをしてくれた。立ち話の中で重要な情報や意見も頂戴でき、人目につく場所での作業は様々な効果があることを学んだ。人が立ち寄ってコミュニケーションをとるような場を提供すれば面白いなと感じた。人を巻き込む機会創出にも発展したかもしれない。
- ② 課題としてきた"地区住民と協働作業"。今回、集落協定参加メンバーにお願いして、3人に作業を支援していただいた。主に50代の女性だったのだが、その年代以上になると世間体が気になり、協力したいと思っていても行動には移せないようだ。田舎特有の人目・世間体の在り方を改善するような"公"の活動理由を示せるようなプロジェクトを認知させる必要があると感じた。





人と共に活動すると様々な学びを得ることができる。潜在的なニーズの中に"人と共に活動して、コミュニケーションをとりたい"が在ると感じている。そのニーズを引き出して、具現化していくことを意識して活動することが大切だと学んだ。

② 「福島県 伊達市 霊山町 大石地区との交流事業」

- (1) 10 月 10 日に開催された筆まつり実行委員会の席で、霊山町大石地区との交流を進行していることを報告し、筆まつりにおいて大石地区の「霊山太鼓」を演出して進行を深められないかを提案
- (2) 10 月 14 日に大石地区を訪問し、収穫祭の場で地区住民に対する自己紹介の中で「筆甫」の名前と 関連をインプットしてくる。役職の方々に経緯と理由を報告、相談、提案の実施 →**了承を得る**
- (3) 10月24日の筆まつり実行委員会で報告を行い、筆まつりに交流事業の成果を出す
- ・筆まつり実行委員会の準備作業に大石地区の協力隊も参加していただき、人を加えることで委員会 に変化を生じさせたい。
- ・単発な取組で終わらないように、交流が継続・建設的に展開していく行動が必要。
- ・地域おこし協力隊がネットワークを築き、連携して活動していくことで創出できる物事が在ること を成果として出していくようにする。

(11月の活動目標)

(ひまわり子実の搾油)

① 乾燥させた子実の搾油の実施 支援員から指示を受けている現段階の目標:「搾油して製品化の形を示す」こと。

(活動案)

- ・今年度、協働作業を行った中区集落協定の婦人と搾油を実施する。
- →搾油を行い、製品化へのプロセスと出来上がりの感情をシェアすることで、来年度への機運を高め、可能 性を拡げるきっかけになるかもしれない。
- ・製油工場に確認の上、搾油作業を発注する

(ひっぽ筆まつり実行委員会・霊山地区交流事業)

- 1) 筆まつり実行委員会の一員として、協同作業で準備を実施し、運営の支援を行う。
- 2) 荒廃した看板の修繕
- 3) 霊山町地域おこし協力隊に準備作業の支援を要請。交流を図る。11月3日 大石地区訪問予定。
- 4) 霊山大石地区、霊山太鼓の演出のコーディネート。

(地域伝承マップ)

① 来月、月初めのかわら板発行で「裏区」と「古田」地区の試作品を提出して、全戸配布。

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(11月度 活動報告)

① ひっぽ筆まつり実行委員会運営支援

(活動内容)

- 1、会議・準備作業5回に参加。11月22日の前日作業では、霊山町地域おこし支援員に作業準備の協力を依頼(テント運搬・設営、しめ縄編み、祭典当日の打ち合わせ)
- 2、隊員が霊山町に訪問し交流を図り、関係構築(業務で1回、業務外で2回訪問)
- 3、11/9 霊山町隊員に筆甫に訪問していただき、筆まつり実行委員長、副委員長、役員5人で打つ合わせのコーディネートを実施。

(成果)

- ・霊山町大石地区と筆甫地区の住民を交流させるとで、今後の交流事業の機会を創出させる
- ・実行委員会内だけでは発展的・建設的にプロジェクトが進行しない状況に、新しい方向性を示す
- ・地域おこし協力隊がネットワークを構築することで、創出できるプロジェクトのモデルを伊達市側 とシェアする
- ・霊山町大石地区より約20名の訪問を実現させ、霊山太鼓を披露してもらう
- ・実行委員会のメンバーに筆神社と筆まつりに対する価値の在り方を改めてもらう
- 伝統芸能(盆踊りなど)の楽しみや価値を改めてもらう
- ・地域おこし協力隊の認知拡大と、事業制度に対しての需要の向上

(課題)

・単年度更新の継続的計画が実行できない状況での活動で仕方ない面もあるが、1回の地域行事にアクションを起こした原因が、地域の内発的発展につながる結果になるかの判断は不透明。

依然、後継者不足、神社、まつりに対してのビジョンを欠如は否めない。来年度以降の活動支援を 実施できない状況で、今回の活動で今後の展開に明確な指針が持ってもらえたかが課題。



11月22日の前日準備作業。霊山町隊員 2名の支援を依頼。協同する中でブレストを し、アイデアをいただく。



霊山町大石地区北組保存会。学生が太鼓を叩く姿に刺激を受けた方も続出。地区外初演奏の機会にもなり、Win-Win と判断。

② 耕作放棄地利用推進事業(ひまわり事業)

- (1) 収穫した子実。"とうみ"作業(種とゴミを分別する作業)を、地域住民を巻き込んで作業実施。
- →以前、へそ大根やそば実の製粉の件で、お世話になった地域住民。"人を巻き込む"という課題を掲げていたが、今回、協力の依頼をし、協同で作業できたことで"人を巻き込む(人が人材として活躍できる機会・場の創出)"という経験となった。この繰り返し、仕組みづくりが大事だと判断している。
 - (2) 福島県石川郡浅川町の搾油工場に収穫した子実を配送。搾油依頼中。



価値在る技術と用具・機械を所持している人材 は地区内にたくさん存在している。いかに輝か せるかで、福祉的役割も兼ねる。



L型のゴミ袋3袋分の子実を収穫。搾油後、 どの程度の油量となってくるか、楽しみ。 事業が発展していくように報告書を作成。

③ 地域伝承マップ作成(古田・裏区)

- (1) 活動と事業の目的が地域住民の浸透してきた成果か、情報提供してもらえる機会が増えてきた。
 - → 過去に集落で作成した冊子の提供、情報提供 3件。
- → 支援員が印刷業者に試作品を、プロが作成した場合のモデル品を依頼してくださった。(別紙参照) 新たな行動の方針となった。

④ 地域おこし協力隊の認知拡大活動

- (1) 宮城県農村振興課主催「平成24年度宮城県中山間地域等活性化研修会」において、筆甫地区における地域おこし協力隊の活動事例発表の機会をプレゼントしていただく。
- (2) 宮城県農村振興課主催「平成24年度 地域活動実践者等養成研修会(地域の交流・活性化に関する研修会)」グループのファシリテーター(推進役)を依頼していただく。







- 1. 筆甫地区同様の中山間地域で活動している方、行政関係者等に地域おこし協力隊事業の活動事例報告を行うことで、外部人材活用の可能性の示唆、ツールの認知拡大の活動にできたと判断している。
- 2. 中山間地域で活動している実践者と意見・情報交換する中でリアルな問題を知る機会になった。問題をシェアし、解決策をブレストすることで、活動へのヒントを得た。
- 3. 研修内容を体験し、地域活動実践者、組織に対しての建設的・発展的合意形成の図り方をインプット。 このスキルは地域創造を実践していく上で、今後、必要不可欠なスキルだと判断する。意識的にアウトプットする機会を探して、実践していきたい。

(活動業務報告)

- 1) 筆甫まちづくりセンター環境整備作業支援
- 2) 振興連事業 水仙球根の植え付け作業支援
- 3) 育成会活動支援(脱穀作業、収穫祭運営支援)
- 4) NHK 取材の地域住民のコーディネート
 - →NHK 記者が地域で取材活動困難のため、取材先の紹介を行う。筆甫のアピール
- 5) ひっぽ豊年者大学 いも煮調理の焚き付け作業
- 6) 伊具高校書道部と打ち合わせ → (目的) 筆神社看板修繕に伴う、学生の地域活動への巻き込み
- 7) 地区内個人の畑での、環境福祉活動支援→チューリップの球根 約1,000 個の植え付け作業
- 8) 筆甫産品組合の会議出席 → 地域資源調査、地域の現状把握
- 9) 竹 1060 プロジェクト活動→小斎地区竹林整備、来年度の事業準備(時間外活動)







(12月活動計画)

- ⑤ 地域伝承マップ試作品 2地区(北山・東山)かわらばん発行
- ⑥ ひまわり油搾油完了後、集落協定参加者を主に対象に搾油講座開催 →ひまわり油を使用した料理 or お菓子講座開催 (ひまわり栽培拡大の模索)
- ⑦ 伊具高校書道部と連携して、筆神社の看板修繕
- ⑧ へそ大根の販路開拓

残りの任期を考慮し、できること、やるべきこと、できないことの協議をお願いしたい。受入れ地域、県、ゆいネット、隊員がWin-Winの合意形成を図り、残りの任期活動を行っていきたい。振興連(地域)からの委託業務は・「へそ販売」事業が残っているが、有休消化(就活)を実行すると活動任期は3ヶ月である。へそ大根が出荷されるのは2月初めなので、半端な活動にならないか不安視している。

隊員人では決定、推進できないので協議の程を宜しくお願い致します。

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(12・1月度 活動報告)

① 地域資源発掘・確立作業

地域振興部会で竹の資源活用作業が事業内容に組み込まれ、平成25年1月14日開催の"常照寺・どんと祭"において、竹の資源活用のモデルを地域住民にお披露目する機会創出の支援

(作業内容)

- (1) 振興連事業、里山竹林整備作業員が伐採した、竹の運搬作業
- (2) 竹灯籠製作作業
- (3) どんと祭において、竹灯籠イベントの開催

(成果)

- ・竹灯籠500本製作
- ・伐採され放置されている竹の資源活用
- ・竹資源活用のモデルを住民に披露、シェア
- →住民に対して地域資源活用の意識を植え付け る機会の創出
- ・行動を起こすことで、アイデアと需要の発掘
- →「竹灯籠をお盆の "迎え火" としてやってほ しい」という住民の意見を頂く
- ・祭りに趣の演出

(課題)

- ・部会下での作業となり地区内では活動を実施しやすくなったが、 "継続と発展" が課題
- ・人員の確保
- ・筆甫内だけでの取組み活動ではなく、理想は、人目につくように回数をこなしていき、「丸森=竹活用」というプランド戦略を図っていくこと。内発的活動が、丸森全域に発展していく活動が具現化していけば面白い

(発展的な活動展開へ)

活動の取組をブログ・SNS等で情報発信することで、ネットワークが構築されていく様を実体験した。 交流があった伊達市霊山地区地域おこし協力隊から、竹資源活用の研修依頼を頂き協力した。

先方は活動地域の神社で地域住民を巻き込んで竹灯籠を製作、大晦日・初詣で地域おこし活動を実行した。活動は好評だったようで、「家の竹も使用してほしい」「作り方を教えてほしい」「今度〇〇の行事でやってみたらどうか」などという声を寄せていただけたとの報告と感謝を伝えていただけた。

内発的活動も必要不可欠だが、ネットワークを築くことで活動が発展的展開をしていく様を体験した。 そうした活動を実践していくことで、参加メンバーが増加したり、新しいアイデアや活動が生まれてくるものと判断している。そして共助関係が構築されていけば面白い。素敵な経験ができた。

- ○活動の情報発信。リソース(ノウハウ)のリリースによる共助関係の構築。
- ○活動人員獲得・新しいアイデアの発掘

(活動画像)

















上左:竹切り出し

上中:運搬

上右: 竹灯籠製作

中左:伊達市協力隊中中:約500製作

中右:どんと祭設置

下左:どんと祭設置

下右:点灯様子

当日は悪天候で予定していた活動を

縮小して実施

「なにやってんだべ?」という "投げかけ" が大事。小さな意識の植え付けが行動となり、 大きなうねりへと発展していく "きっかけ" の創出をどんどん実行していきたい。

② 地域伝承マップ

目標: 1月末までに、協力隊作成のプロトタイプを提出する

(作業内容) (残務作業)

- (1) 筆甫地区内8地区の手書きマップ作成
- (2) 8地区の説明分 約600文字で作成
- (3) 表題で各地区を表現するイラストの作成
- (4) 業者作成のマップを参考に、更なる情報収集
- (5) 表紙・イラストのモデル

- (4)・(5)の作業。
- ・各地区の屋号表・説明文が完成したので 提出して確認してもらう。

③ 地域おこし協力隊活動報告・認知

「丸森町 町民のつどい」という行事において、各まちづくりセンターで取り組んでいる事業発表のブースがあり、その一部を支援員より提供していただき、提出資料の作成を実施。

(目的)

丸森町内で先進的に事業推進してきた筆甫地区の事業活動の内容を多少なりとも他地区に認知してもうらう機会になる。その機会が今後の展開を望める原因となり、外部人材が丸森町内で活動することにつながる可能性が期待できる。貴重な機会を頂けた。また、資料作成を行う過程で活動のフィードバックができた。

(1・2月の活動計画)

- ひまわり事業(耕作放棄地利用推進事業)の報告書作成
- ・地域伝承マップのまとめ作業(1月中)
- 伊具高等学校 書道部への筆神社看板木材運搬
- ・地域伝承マップの表紙デザイン(プロトタイプ)
- 最終報告会 報告書作成

平成24年度 2月 地域おこし協力隊活動報告

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(活動内容)

① (地域伝承マップ製作)

- 1、当初、手描きのマップ提出で作業完了予定だったが、支援員の指導の下、業者に依頼し製本した小冊子 を制作して残す方向で作業を推進していく段取りになった。
- 2、製本作業の準備(屋号表の作成・誤り確認、伝説イラストの充実、屋号のイラスト等々)
- 3、歴史・史跡・伝説・屋号等を伝承させる目的と、今後、マップが発展→展開し"ヒト・ツーリズム"につながるきっかけになるための資源として活用できるような意図で作業。
- 4、2月12日に振興連事務局、業者と打ち合わせ実施 → 製本作業進行中。

(成果)

- 情報収集でマップのパフォーマンス向上
- ・紹介文、屋号、構成のデータ作成

(今後の作業)

- 1、石碑の徹底調査→マップへの記入
- 2、現在の世帯主の確認作業
- 3、業者との製本作業の進行

②(ひまわり事業)

- 1、報告書作成=完成
- 2、振興連より指示作業= (1) 品種:はるりんどうの調査・価格・購入先・購入時期
- (2) 臭い消し・ろ過装置の大きさと価格(3) 成分検査依頼(4) 包装容器の調査
- 2月18日(月)農業創造センターと会議、相談、助言を頂く
- 3、ひまわり油の利用方法の考案の件について ひまわり油の利用方法を提示するように指示を受けた

⇒ (耕作放棄地利用推進事業を隊員観点で提言)

事業を実践して実感したことがある。本来この事業は「地域振興部会」の事業だったが隊員が単体で活動せざるをならない状況だった。隊員が存在しなくなった後も地域で事業が継続・発展されていく仕組みを構築することも業務使命と念じ活動してきた。しかし、住民の声から「部会の事業だから、手伝いたくても手伝えない」「メンバーが不在している状況で勝手なことはできない」「メンバーが作業を実施していなのはおかしい。協力したくてもしたくない」と疑問と懸念の声も寄せられていた。部会下の活動であるが故の難しさを実感する中で、部会員以外の地域住民にビジョンを示し、巻き込んで作業を実施する事に対して大変な難儀をした。コミュニティにおける地域振興の合意形成を図っていく過程は困難なことを学んだ。

一番の要因は隊員の実行力不足であることは事実だが、どのような方向性で事業を推進していけばいいのか相談しようにも部会にはメンバーも集まらず、作業の協力を要請しようにも困難な状況だった。

(来年度も外部人材を活用して事業推進を実行していくと仮定して)

(組織の構造・意識改革の必要性)

・「個」から「公」への意識改革が必要

具体的な地域活動へと伴走するように仕向けるファシリテーター役(機能)が重要だ。地域民の既存の 価値観を改革し、地域社会、地域活動に参加してもらえるような仕掛けが必要である。

- ⇒見本、指針となるための成果を出す活動が今年度だった。
 - ・来年度、同じような状況下で外部人材を事業に従事させることは、自らの経験上、懸念を抱く。 隊員がひまわり油の活用方法を考案して行動していくことよりも、部会でどうしていきたいのか、ビジョンとミッションを確認することが優先である。部会で確認した上で、外部人材を活用していけば事業の展開も拡大していくと判断する。

③ (筆神社看板修繕プロジェクト)

(成果)

- ① 製材作業を筆甫地区外の工務店に協力 していただくことで、地域おこし協力隊 の活動が口コミになった。
- ⇒信頼関係の構築、今後の展開の原因に
- ② 2月13日 伊具高等学校書道部に看板 用木材の搬入作業実施。
- ⇒地域活動を学生と協働する機会創出
- ③ 筆まつり実行委員会に波及効果を出す ⇒昨年は実施しなかった時期に実行委員会 を開催予定。報告と引き継ぎを実施予定。

(課題・反省)

- ① 木材店から準備完了の連絡を頂き、1月 18日に木材搬入を実施すると伊具高校 側と段取りを組んだ。しかし、当日引き 取りした木材は高校側に引き渡せる状態 ではなかった。「大丈夫だろう」という安 易な考えで、確認を怠った結果で高校側 に不備を与えてしまった。
- ⇒注文時に意思を明確に伝える、確認作業の 徹底を実行する
- ② 実行員との合意形成で作業開始が遅れてしまったこが影響している





人とつながることで選択肢が増えていく。仲間がつくることで出来ることが大きくなっていく。若い世代、学生に地域社会で活躍できる場と機会を提供し、人材育成していくことは地域の未来をつくっていく上で大切なこと。その事実を活動で実感した。今までつながっていなかった点と点をつなぐ役目を担い、線を結いていけることも地域おこし協力隊の仕事であり、魅力だと学させていただいた。

(2、3月の活動計画)

- ① 地域伝承マップ→石碑の徹底調査、業者と製本作業(改善・訂正)
- ② ひまわり事業→2月21日大内えごま搾油工程視察(モデルの報告書提出) ひまわり油の用途隊員優先の場合、ひまわり石けん製造後、プレゼント
- ③ 県報告会の報告書作成
- ④ アンケート収集

(任期満了に向けて)

- 3月末日の任期満了に向けて関係組織が納得する形で残りの出勤日での業務を遂行していきたい。
- ・出勤残日数=28日、有休休暇残日数=17日、勤務日数=11日。

今回の報告会はそのような目的で開催するのか隊員には情報が伝達されていませんが、報告会の目的に合った準備を行い、有意義な報告会にするために尽力したので、ご指導・ご鞭撻・ご協力の程宜しくお願い致します。

平成24年度 3月 地域おこし協力隊活動報告

地域おこし協力隊 筆甫地区担当 玉手 孝行

(活動報告)

- ① 神々の住む山里 筆甫伝承マップ製本作業
 - ・取り組んできた筆甫地区の地域資源を残している作業。製本に向けて支援を頂きながら、作業進行中。 3月25日(月)に製本完了予定。 ※別資料参照
- ② 筆甫地区住民に向けた報告書作成
 - ・3月15日の全戸配布のかわら版で地域おこし協力隊の活動報告を実施させていただく予定。 原稿制作。
- ③ 3月25日 県庁による最終報告会の資料作成。
- ① 地域伝承マップ→製本作業
- ② ひまわり石けん製造方法の模索作業
- ③ 県報告会の報告書作成
- 4 アンケート収集